「街あるき」で呉の魅力を発信する

広島県呉市　一般社団法人くれ・ひと・まち情報応援団

広島駅から呉線に乗ると、陽光きらめく瀬戸内の多島美が続き、およそ30分で呉駅に到着する。呉市は戦前、戦艦大和を建造した日本一の海軍工廠が置かれた街として、戦後は製鉄や造船業で栄えてきた。観光スポットとして「大和ミュージアム」が有名だが、日本近代化の歴史を象徴する建築や文化遺産、また神社仏閣や史跡が数多く残るなどその魅力は奥深い。

呉のまちの歴史と魅力を発見し伝えていこうと活動する、一般社団法人くれ・ひと・まち情報応援団（代表・浦山寧子さん）が企画する「街あるき（阿賀を歩きましょう）」に同行した。

呉線の安芸阿賀駅前に13時に集合。約20人の参加者が集まった。今回の街あるきの阿賀地区は、呉駅の隣駅ながら山を隔てて独立した街の様相だ。空襲の難を逃れたこともあり、戦前からの建物が今なお残り寺社仏閣が多い。

冒頭、代表の浦山さんから「街あるきは今回で24回目になりますが、雨に降られたことが一度もありません。今日も絶好の街あるき日和なので楽しんでください」とご挨拶。参加者に配られた資料には、各ポイント間の距離、標高、階段の段数、歴史的な解説が書かれている。これらの詳細なデータは、同会メンバーで街あるきを企画しガイドも行う竹本哲朗さんが、すべて自分の足で歩いて詳細に記録したものだ。およそ2時間のコース。竹本さんの後を追いながら歩を進める。

はじめに訪れたのは昭和14年建築の木造二階建ての芸南病院。基本構造や外部の仕上げは当時のまま現役で開業中の建物だ。少し歩くと道路脇には平成13年の芸予地震で損壊した神田神社の鳥居が保存されている。

神田神社は阿賀の総鎮守府。社殿は高台にあり、階段89段を下った平地は江戸時代に海を埋め立てたもので、入口の灯篭はかつて常夜灯に使われていたそうだ。果たしてどんな景色だったのだろう。また神田神社の境内の絵馬は、呉市の有形文化財に指定されており、江戸時代に神社で行われた歌舞伎の様子や当時の生活が描かれている。境内の森は、市街地としては珍しく自然の状態で常緑樹が茂り、ヤマビワなど県下でも珍しい樹木を観ることができる。

続けて旧市街へと向かう。この一帯は海浜が埋め立てられ、胡町、そして中町と呼ばれるようになった。一際目を引く建物が、大正7年に建てられた鉄筋コンクリート二階建ての「馬場医院」。建築から105年経過した今でも現役だ。

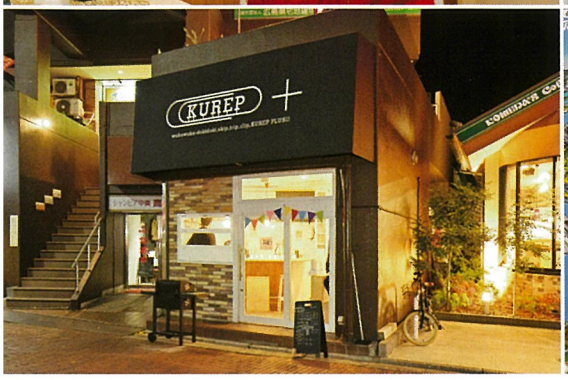
続けて細道の階段を85段登り「称名寺」を訪れる。まるでキノコのような他に類をみない形状の鐘つき堂は2019年7月に建設され、著名な建築家により鍾乳洞を連想して設計された。建築作業は、呉工業高等専門学校の生徒と専門職が協働で行ったそうだ。その後、お墓の中の細道を上がると、本日のコースの最高地点に達する。阿賀に住む浦山さんも、普段と違う角度から見る地元の景色に驚きを隠せない。竹本さんは「街あるきには全体を俯瞰できる場所が重要」と語る。

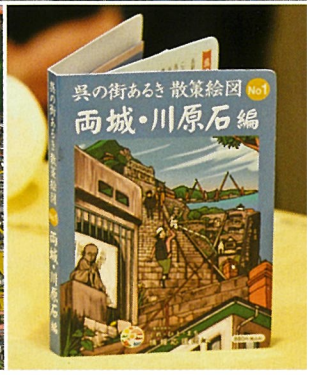
坂を下り漁港に降りると「阿賀のお漕船」の看板がある。これは1701年、暴風のため宮島管弦祭の御座船が遭難していたところ、居合わせた阿賀と江波の漁民が協力して救助した。この縁により毎年、阿賀と江波から船を出して御座船を曳くことになり、この船を漕船と呼ぶことになったそうだ。その後、「豊栄新開経営の石碑」を訪れ、阿賀の海浜開発の歴史を確認し、安芸阿賀駅に戻り解散となった。

数多くの見所が凝縮され、港から高台までの高低差もあって想像以上に歩きごたえがあった。参加者のなかで最近呉に移住したという宗政さんは「短時間で多くのルートを企画してくれるので、少しずつ街を知ることができるのが良い」と話す。市内ホテルの支配人を務める松浦さんは「街あるきで体験できる呉の深い魅力をお客様に紹介したい。呉はまだまだツーリストが少ないが素晴らしい景色や珍しい建築がたくさんあり可能性を感じている」とのこと。それぞれ目的を持って参加を重ねている人が多いようだ。

街あるきの前日、同会の活動拠点として、呉市役所近くにあるスペース「KUREP」を訪ね、浦山さんと竹本さんにお話を伺った。

代表の浦山さんは呉に生まれ育ち、長年に渡りライターとして取材し、紙媒体やWEBにより呉の情報を発信してきた。さらに、市民の皆さんの創業やいろんな夢を応援したい、ネットとリアルをつなげる





場所をつくりたい。そんな思いから「KUREP」を作り、地域のサロンとして自由な意見交換の場ともなっていた。ところが、そんな矢先にコロナ禍になり集まりが難しくなる。そんな折、KUREPの存在を知って来訪した竹本さん。「呉はすごく面白い街、いろんな見どころがある、こんな歴史があります」という話をしてくれた。そこで「コロナ禍でも歩くぐらいできるのでは?」という思いから浮かんだのが街あるきだった。

竹本さんは呉の至る所を自分の足で歩き、正確な距離や標高差を記録した街あるきのコースを企画した。各ポイントの歴史的背景を広島の県立図書館で文献を調べた。浦山さんは振り返ると、呉には海軍工廠や戦艦大和などすごいストーリーはあるけれども、空襲などの暗い歴史が地域であまり語られない傾向を感じていた。竹本さんの話を聞くことにより「歴史を踏まえるとすごく面白い背景が見える街に生まれたことに改めて感動した」と語る。

浦山さんが、KUREPの書棚から、今年作成したばかりの街あるきマップ「呉の街あるき　散策絵図（両城・川原石編）」を見せてくれた。これまでの街あるきで調べたデータをまとめ、上空から見下ろした鳥瞰図に高低差が分かるイラストが描かれている。裏面には地域の見所を示して、分かりやすく歩いてもらえるようにした。QRコードを入れ、地図に収録できない詳細な説明も見ることができる。ポケットの大きさで開閉しやすい「ミウラ折」で作成した、プロの知恵と技術を合わせたこだわりのマップだ。価格は880円。ホームページなどで購入できる。呉を訪れる方はぜひ手にとってみてほしい。

「全国の街でも同じ取り組みを考えているところがあれば、コツを教えるのでぜひ声をかけてほしい！」と同会は意欲的だ。呉の街あるきは概ね月に一度開催している。ぜひ皆さんの地域の再発見にも活用してみては。

【連絡先】
一般社団法人くれ・ひと・まち情報応援団
メール：info@kure-ouendan.org